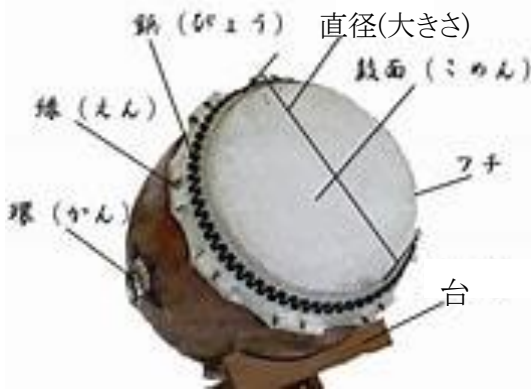


# 「響き」について

藤本 邦雄



「響き」という言葉はいろいろな意味がありますが、音楽の業界では「オーケストラの響き」とか「ブラスの響き」などという表現が使われます。和太鼓の分野ではこの「響き」が特別な価値を持ちます。

打楽器は世界中で数えきれないほど多くありますが、日本で独自に発達した和太鼓は、他の打楽器では決して出すことのできない独特の「響き」が特徴の楽器です。和太鼓は、最近では各種の材質が使われますが、櫂のくり抜き胴に黒毛和牛の革を張った太鼓が最上級の物とされています。

「響き」とは、太鼓の鼓面(革)をバチで「ドォーン」と打った時の、「ォーン」と後から聞こえてくる残響音の事です。太鼓の胴の内側で複雑に反響し絡み合った音が、革を更に振動させて出てくる音です。この和太鼓の響きは「人の魂に、直に伝わる」と私は表現しています。ですから太鼓の演奏を聴くと心が踊る、気持ちが高ぶって元気や勇気が湧いてくる、等と聞く人見る人に大きな感動が伝わります。太鼓に興味のない人や嫌いな人には同じようにただうるさいだけの音として聞こえますが、太鼓が好きな人にはこのように大きな感動が伝わります。実際に人前で太鼓の演奏を経験した人は実感されたと思いますが、演奏する側は、見る(聞く)人達の何倍もの感動や勇気・自信・充実感を味わう事ができます。

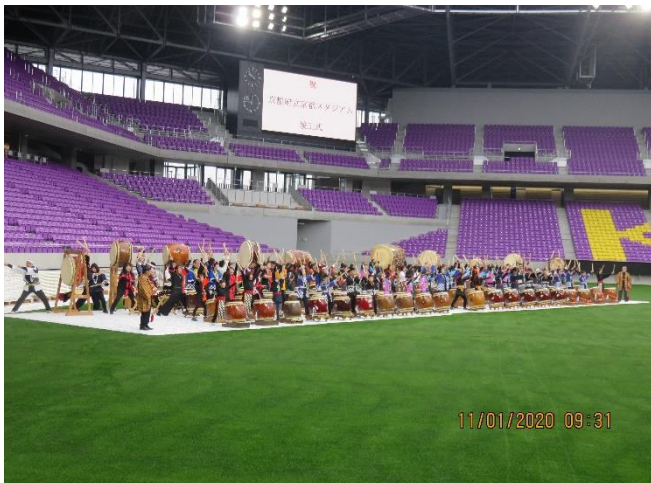
このように、しっかりした演奏技術で太鼓を長年打ち続けると、太鼓の胴が「響き方を覚える」ようになります。太鼓仲間の特殊な表現で「鳴きを覚える」と言います。革ももちろん新しい時は固い音ですが、打ち込まれ続けて弾力と強度が増しながら、胴の共鳴がどんどん良くなり、しっかり深みのある重厚な響きを出せるようになります。

私は児童自立支援施設の小中学生に太鼓を教えながら「君たちが一生懸命この太鼓を打ち続けていると、太鼓が響き方を覚えて君たちの後輩たちが打った時に、今よりも良い音を響かせて、その響きをまたその後輩たちに引き継いでいってくれるようになるよ」と教えています。生徒たちも生き生きとしっかり力強く太鼓を打ち込んでいます。



野外ステージでの演奏

普段は顔を合わす事のない多くの人達と一緒に太鼓演奏をすると、また別の感動を味わう事ができます。正に「打てば響く」の感覚です。JR 亀岡駅前のサンガスタジアムの竣工式で、小学生から熟年まで約 100 名の京都府内各地の太鼓打ちが集まって記念演奏をしました。半年間かけて何度か合同練習を重ね、素晴らしいスタジアムのまっさらな天然芝の上で力いっぱい演奏を披露しました。サッカースタジアムという特殊な空間での独特の響き方をした太鼓演奏の経験は、参加したすべての人達にこの上ない感動を与えました。特に子供たちには一生



サンガスタジアムでの 100 人太鼓演奏

残る二度とない大切な体験となりました。